

仲間と親とあゆみ続けて

32年間の障害者福祉実践

第7回 2000年の東海豪雨



ゆたか希望の家相談支援事業所

佐藤さと子

さとう さとこ/日本福祉大学卒業後、社会福祉法人ゆたか福祉会に勤める。全障研愛知支部事務局長

🦋 仲間たちの労働にはどんな意味があるのか

障害のある仲間たちの労働にはどんな意味があるのか、職員間で議論を積み重ねて、ようやくわかりはじめたのは就職して10年経った頃でした。

私は人間の労働には「精神労働」と「肉体労働」の2つの側面があると考えています。私たちの仕事の場合、新しいパウンドケーキやクッキーの商品開発は精神労働。他方、仲間といっしょにつくる工程での援助は肉体労働になります。精神労働は大変な要素もあるが達成感があります。肉体労働は一日中立っているのも、しんどいけど夜はよく眠れます。社会福祉労働はこの2つの側面が複雑に絡み合っているのも、しんどさや達成感の感じ方も通常の労働とはちがうのではないのでしょうか。

社会科学では「労働とは、目的意識をもって物事に動きか

品の班は給料の算定基準をつくり、それに沿って支払いをするしくみになりました。自主製品の場合は販売の金額によってボーナスが増える可能性があり、逆に売れないと下がる可能性もあり、職員の商品開発の能力が問われることになりました。

労働のもつ意味の議論は、職員にとっても自分たちの労働の内容とその対価である給料を意識するとりくみでもあります。こうした議論の中で職員の専門性はつくられていきます。

🦋 東海豪雨のあの日

2000年9月11日から12日にかけて東海地方を中心に猛烈な雨が降りました。東海豪雨です。11日の夜、私は名古屋市の労働会館での会議に参加するため、作業所から車で移動していました。百年ぶりの大雨がまる一日降り続いた影響で名古屋市内の冠水はかなりひどく、会議は中止。当時住んでいた西区の庄内川の近くにあるアパートに、冠水を迂回しながら帰りました。夜に大雨警報が出て、未明に庄内川の支流の新川が決壊。西区、枇杷島町、新川町と、あかつき共同作業所の周辺の市町村が2メートル近い浸水にあいました。

私は大雨警報の広報車の音を聞いてすぐにあかつき共同作業所に向かいました。深夜、新川が決壊する前に付近に着。高台に駐車して、湖のようになった田んぼの道をかさで探り膝上まで水に浸かりながら、ようやく作業所の玄関に行きつくことができました。大雨の前に電気のブレーカーを落とし、床にあるものはすべて机の上へ上げ、車はマフラーを

けることすべてを言う」とされています。価値を生むこと、お金を稼ぐことだけを労働と言うのではないということですね。では、仲間たちにとって労働とは何でしょう。

発達年齢が1歳半から2歳の力があると、目的意識をもって働きかけることが継続してできるようになり、見通しの力がついてきます。3歳半から4歳半の力があると、自分が作った物がお金に変わり、給料がもらえるということが理解できるようになります。仲間たちの給料はどうやって決まるのか。販売した商品の代金、下請けで稼いだお金の総体の金額から、材料費や経費を引いた分を仲間たちでどう分配するか、労働部会でさんざ議論を重ねました。班ごとに収入も経費もちがうので給料の金額はちがって当たり前なのか、一方で給料をみんなで分配するとなると算定基準をどうつくるのか、課題がたくさんありました。

結局、重度の仲間の現場はみんな同じ額で分配し、自主製高くして停めるなど対策をしてあったこともあり、床が濡れただけで大きな被害はありませんでした。翌朝、かけつけた職員で床掃除をして、その日のうちに作業所は再開。天然酵母の生地も生きていて、パンを焼くことができました。しかし、川に近い民家のほとんどが床上浸水になり、そこで暮らしていた障害をもった仲間たちは本当につらい体験をするようになりました。

🦋 災害時の作業所の役割

自閉症の伊藤さん兄弟は、決壊した新川の近くに自宅がありました。翌朝、作業所の送迎車で近くまで行くことになりました。浸水域が広大に広がっていて家には近づけません。翌々日になってようやく水が引いた時に迎えに行くと、出会ったばかりの頃の不安な表情に戻っていました。水浸しで畳が浮くなか、眠れずに不安な一晚を過ごしたことをお母さんから聞きました。両親が家の片づけをしている土日の間は、兄弟で安心できる作業所で過ごしてもらおうと、特別の職員体制をつくって受け入れました。ほっとして、やっといつもの場所に座った時の表情を今でも忘れません。

同じく自閉症の八尾さんは、自宅が平屋建てで、近くの学校に腰の高さまで水に浸かって避難しましたが、大勢の人がいる避難所の中には入れず、結局隣の知人の家の2階に避難をしたそうです。しかし、それでもいつもとちがう環境のなかで、かなり不安そうな表情に変わっていました。送迎車を出して、少しでも慣れた作業所で過ごしてもらおうようにしま